講演

多様性に向き合う姿勢を育んで ダイバーシティあふれるまちを創ろう

日時：2021年7月23日（金）
場所：オンライン（第6回グローバルフロア企画）

横田雅弘

皆さん、はじめまして、明治大学の横田と申します。今日は1コマいただいて、ダイバーシティについてのお話をしようと思います。

今日のお話の目的は3つあります。1つめは、ダイバーシティとは何かについて知ってほしいということです。たぶん皆さんにとってまだダイバーシティは自分とはちょっと違う世界のことかなと思っているかもしれません。しかし、ダイバーシティは自然なことなんだ、ということをお伝えしたいのです。2つめは、ダイバーシティを受け入れる姿勢を育んでいただきたいと思い、10のヒントをお届けします。3つめは、人が暮らすまち、実はまちっていうのは誰でも住めるんですね。六本木に住もうと思ったらお金がないと住めないかもしれませんが、基本的にまちは誰でも住むことができます。そんなまちを、ダイバーシティとインクルージョンという観点から考えてほしいというのが3つめです。

簡単に自己紹介をします。私は、留学生アドバイジングを専門として一橋大学で21年ほど教員、そして留学生相談室の責任者として仕事をしていました。30年以上前ですけれども、その頃私にとって異文化というのは、外国人のことでした。一橋では留学生は半分以上が大学院の学生で、夫婦同伴とか家族同伴の人たちがたくさんいたのです。彼らを支援するというのは、大学の中のことだけじゃなくて、家族のまちでの生活全体を支援するということになりました。留学生本人は日本語も話せるのですが、家族とか子供はまだできません。留学生が家族の適応を心配していると、自分の研究もできないんです。それで、まちとして外国人を支援する、そんな任意団体を立ち上げました。そのうちに、まちっておもしろいと思うようになりました。実は、外国人を支援する日本の方々の中にも、すごくいろいろな方がおられて、海外で何10年も暮らしてきた人が、外国人を手助けしたいという人もいれば、英語を喋りたいという人もいれば、お花を教えたいという人もいれば、友達になりたいという人もいれば、様々な方々が外国人の支援のために参加してくださったんです。でも、必ずしもみんな一丸となって同じ方向で進んだわけじゃありません。まちというものの中に、実は異文化が溢れているんだと思うようになったんです。

そんなことでまちづくりという授業も始めて、異文化というのは外国のことだという観点から、国内的にもいろいろな人たちがいて、これも異文化と考えることができるというふうに思うようになったのです。

その後、2008年明治大学国際日本学部ができた時に移籍しました。すぐに出会ったのが、ヒューマンライブラリーという世界的なイベントです。ヒューマンライブラリーはその言葉どおり、人を貸し出す図書館です。つまり、「本」となる人を30分貸し出して、来場した「読者」はその「本」の語りに耳を傾けるという仮想の図書館イベントです。「本」には、さまざまな生きにくさを感じているマイノリティの方々がなってくださることが多いです。私のゼミでこれを10年間開催しました。それで、さまざまな「マイノリティ」と一般に言われている方々にお会いすることになりました。しかし、このことをずっとやっていると、自分はマジョリティなのか、ということにも疑問が出てきて、自分も多様性の中の一部なんだと思うようになりました。現在、中野区のダイバーシティ推進のプロジェクトを自分の実践研究としてやっています。今日は、こんな自分の研究人生をなぞるようにして、お話をさせていただこうと思います。

お話に入る前に簡単に言葉の定義だけ整理したいと思います。よく言われている「ステレオタイプ」「偏見」「差別」は、皆さんもちろん聞いたことがある言葉ですが、簡単にその違いをお話ししましょう。

「ステレオタイプ」は、ある社会集団、そのメンバーの属性に関する信念ということです。この言葉そのものには、必ずしも良い悪いの評価は入っていません。多くの場合、「ステレオタイプだよね」と言われたりするのは、よくない意味で使われることが多いと思いますが、この言葉そのものには、そういう意味合いはありません。「偏見」というのは、その社会集団やそのメンバーを否定的に評価する心の構えといってよいと思います。ここには評価が入ってきます。でも、偏見があっても差別はしない人もいます。「差別」というのは、行動や制度に現われたものです。ある社会集団やそのメンバーに対してだけ行なう否定的な行動・制度です。偏見が何らかのアクションに結びついてしまうと差別になります。

次に、「ダイバーシティ」と「インクルージョン」についても説明します。ダイバーシティは日本語で「多様性」という言葉が当てられると思います。ただ今日、皆さんは国際コミュニケーション学部、私のところも国際日本学部ということで、ダイバーシティは、グローバル人材とか、多文化共生とか、「国際」という観点から考えるということが皆さんにとって馴染みのある結びつきだと思います。

先にお話ししたように、まちで外国人を支援することになったら、いろんな日本人の方々が来られました。ある日、国際畑をずっと歩いてきた元大企業の幹部の方々が、退職後国際交流で何か貢献できるのではないかと訪ねてこられました。ところが、私にとっては違和感のある発言がたくさんありました。「若い皆さんはよくわかってない」とか「奥さんたちの家計簿のような会計では責任ある仕事はできない」とか、いきなりおっしゃるのでビックリしました。国際人を自認する人が、うちに帰って亭主関白だったり女性に差別的だったりするのはおかしいんじゃないか。男女平等を訴える人が、性的マイノリティに不寛容なのはおかしいんじゃないか。多文化共生と言いながら、国際にばかり関心を寄せて、ジェンダーとか障害者の社会参加に関心がないとかいうのはちょっと変じゃないかと思ったんです。

多様性という言葉は、別に国際だけじゃないし、男女だけじゃないし、いろいろな多様性があるわけです。すべての多様性を考えれば、どこかにだけは平等を主張して、どこかには非常に偏見がある、差別をしている、というのはおかしい。こんな問題意識を感じてまいりました。

異文化間教育から見ると、国際だけが異文化ではなくて、多文化の共生というのも、一般的に国際の観点で使われる言葉ではあるのですが、外国人との共生だけではないですね。「国際」という国の際ということから。文化の際、「文化際」これをダイバーシティと言ってもよいと思います。

このように、何でもかんでも多様性というふうに考えると、頭を整理する上ではやりにくいですね。そこで私は、今の中野での活動には、電通ダイバーシティ・ラボという組織が採用している4つの領域を用いています。その4つの領域とは、障害の領域、ジェンダーの領域、多文化の領域、ジェネレーションの領域です。障害の領域には、多様な障害が含まれるだけでなく、ユニバーサルデザインや障害者エンタメなど、社会の関心なども含まれる大きな枠組みです。ジェンダーも、男女共同参画などだけではなくて、多様な性のあり方が含まれますし、ワークライフバランスのことも含まれています。多文化は、国籍、地域、民族、宗教、言語、食文化、インバウンドなども含まれます。最後のジェネレーション、これは年齢・世代です。子どもの問題、高齢者の問題などですが、もちろん高齢者になれば障害を持つ人も多くなってきますので、いろいろ重なってくる。この4つとも、いろいろなところで複合的に発生しています。この4領域がダイバーシティを網羅しているとは言えないかもしれませんが、複合的なものも含めて、整理するには有効な枠組みだと思います。

次にソーシャル・インクルージョンについて少し説明します。社会的包摂という意味ですが、ダイバーシティ & インクルージョンとして一緒になって使われるのはなぜか。それは、ただ多様な人がいるということが認識されるだけではなく、誰一人として社会から排除されない、そしてその属性や状況にかかわらず、社会の正当な一員として受け入れられる、このことが大切だという意味です。多様性というのは現実にあり、その多様性が社会の中に阻害されずに、ちゃんと受け入れられるような社会、こういう社会を目指そうという時に使われる言葉です。ですから、

まちづくりと関係してくるんです。まちは誰でも住んでいいはずなのに、そのまちから疎外されたんじゃかなわないですね。ある障害を持った人とか、性的マイノリティの人がとても住みにくいとなると、何かおかしいということになる。

それでは、さきほどヒントを皆さんに差し上げますと申し上げた1番めのヒントから始めます。「ノーマライゼーション（normalization）の理念で考えよう」です。北欧の高福祉社会の基本理念の一つといわれています。特殊な状態でなく、当たり前の状態、自然な状態を前提に制度や施策を設定するというもの。これだけ聞くと、それは当たり前じゃないかと思うかもしれませんが、障害者も高齢者も外国人もある程度存在することが普通、自然なので、そういう存在は逸脱しているんじゃなくて、健全な社会の重要で不可欠な構成員だから、社会もそれを前提に設計しなければいけない、という考え方です。皆さんの大学に外国人留学生が一人もいないとしたら、この大学ちょっと変じゃないかと思うでしょう。障害者が一人もいないまちといったら、普通じゃないでしょう。だから多様な人たちがいるということを前提に、全ての住民をインクルード（包摂）するということになります。また、障害をどう捉えるかを考えると、これまでは足に障害を持っているのはその人個人の属性だという「障害の個人モデル」が想定されていましたが、実は段差がなければ車椅子でどこにでも行ける。だとすれば、障害を成り立たせている要因は社会の側にあるとも考えらます。これを「障害の社会モデル」といいます。個人に障害があるというよりも、社会が障害に対応していないところに問題があるという考え方です。

もちろん、そんなこというとお金がかかる。すべての階段にスロープをつけるなんて無理だという意見があるでしょう。確かにそうですが、物理的なことだけではなくて、たとえば、傍にいる人が二人で車椅子を持って階段を上げてくれるということがごく自然に、気負いなくできる、気遣いせずに気楽に頼める、そんな人間関係のあり方、社会のあり方も含めた考え方です。多様性について考えることとまちづくりとの関係はこのようにつながっているのです。

上記で、私は「ある程度存在する」と言いましたが、ある程度ってどのくらいか、ご存知でしょうか。皆さんの中で、「鈴木さん」という方が友達やお知り合いにいる方はとても多いのではないでしょうか。では、車椅子とか肢体不自由な友達やお知り合いはどのくらいいますか。皆さんにお聞きすると、こちらの方がずっと少ないんです。実は、ほぼ同数なんですね。つまり、私たちはそういう方に会う機会がすごく少ないということです。先ほどあげた4領域で何らかの課題（障害）を抱えている方は、単純に合計すると全人口の半数以上になります。男性の5%は色覚障害を持っていますし、LGBTQの出現率は8.9％、100人いたら9人ぐらいということです。それぞれのマイノリティの数は少ないけれど、全体では全人口の半分を上回る。

さて、2つめのヒントに進みましょう。私はマイノリティの人という言い方をして、こうやって数えたりしました。しかし、「人はどこかでマイノリティであり、マジョリティだ」ということです。また、今はそうじゃなくても、事故にあって車椅子ユーザーになる可能性は誰にでもある。年を取れば当然のように耳が聞こえ難くなるし、歩き難くなります。外国出張に行って、突然現地で外国人になればマイノリティですね。マジョリティかマイノリティかというふうに二項対立で考えるんじゃなくて、自分の中にもマジョリティなところもマイノリティなところもあると考えてはどうでしょうか。

これをもうちょっと考えてみましょう。たとえば、イスラム教は日本ではマイノリティですが、インドネシアに行ったらマイノリティとは言えない。つまり、マイノリティってなんだろう、マジョリティってなんだろう、これらを分けるものはなんだろう、と考えてみてください。3つめのヒントは、「マイノリティは、その行為や事物そのものにあるんじゃなくて、人の目の中にある。マイノリティだ、逸脱していると判断する人の目は、その人が所属する社会、文化、時代に強く影響されている」ということです。つまり、日本だとマイノリティになるが、ほかの国ではマイノリティにならないということがあるし、ある時代にはマイノリティだったが、今の時代はそうでないということもある。また、マイノリティかどうかは、周囲にそれと認知される時にマイノリティになるわけで、それがわかるラベルがないとマイノリティかどうかわからない。ある時までマジョリティ

として処遇されていた人が、たとえば日本語の発音が外国人のようだと分かった途端に、マイノリティになってしまう。

4つめのヒントは、「偏見と差別について考えるのは、すごくいい学習経験だ」ということです。本当はどうなのかを冷静に考える良い機会なのです。メディアでいろいろ言われているので悪いイメージを膨らませていたとしても、実際に自分では一度も会ったことがないということはよくあるんじゃないでしょうか。一つ質問します。茶髪はなぜ悪い？あなたはその理由を説明できますか？皆さん、1分差し上げますので、考えてみてください。

発言してくださる方いらっしゃいますか？

（フロア）「個人的には茶髪は悪いと思ってないんですけれども、悪いと言われるのは、不自然と思えるから」。

ありがとうございます。実は私も、息子が中2の時に、まゆ毛もそっちゃう、茶髪になっちゃう、成績もガタ落ちで、その時、何が悪いって言われて、答えられなかったんです。私が言ったのは「似合わない」なんだけど、そんなの関係ない。似合うか似合わないか、親父がそう思うだけだと。それは私にとって衝撃的な経験でした。合理的な説明は難しいと思いました。口紅はいいけど、茶髪は悪い。茶髪は健康に悪いとも言えないし、茶髪だと周りの人の気分が悪くなる？ でも、それは周りの人の勝手な言い草ですよね。嫌いだということと、悪いと評価することも別なことだなとも思いました。

図1、この人はなにか悪いのか？（イラスト：なかむら　るみ）

この図1の方は、ヒューマンライブラリーに出てきた「本」の方です。この人はキャプションに、「自分は悪い人じゃないんだけど、自分を見てびっくりする人がいるのはよくわかってるよ」と書いています。さて、この人はなにか悪いのか？こういう格好をしてはいけない、ということがあるのか？なかなか難しい問題だなと思います。これは、茶髪はよいものだと言っているのではありません。悪いかどうかをよく考える機会になると言っているのです。

ここでヒューマンライブラリーの話をしましょう。ヒューマンライブラリーは2000年にデンマークで始まりました。自分たちのマイノリティの友達が暴力を振るわれるのは、そのような人と話をしたことがないからではないか、もっと個人的に話す機会を作ったら、差別は少なくなるのでは、と考えて、図書館のモデルを使って、30分間人を貸し出して対話してもらうというイベントを野外ロックフェスティバルの片隅で開きました。これが大評判になって、ヨーロッパ全土を駆け巡ったのです。今ではもう100カ国を超えて開催されており、日本でもほとんど毎月のようにどこかで開かれていると言っても過言ではありません。明治大学でも10年間、私のゼミでやってきました。

これが、2008年に朝日新聞に紹介されたロンドンでのヒューマンライブラリーの記事です（図2）。

生きている図書館

私たちを借りてみませんか？

元マフィア、移民…

「少し危ない」が人気

世界発 2008

■「生きている図書館」を開くための手引き 欧州会議の人権教育関係サイト（http://www.coe.int/hre）から。「本を表紙で判断するな！」（生きている図書館の経験者ガイド）の英語版「Don't judge a book by its cover!/ The Living Library Organizer's Guide」のフランス語版などがダウンロードできる。

What's YOUR prejudice?

図2、2008年日本で初めてヒューマンライブラリーが紹介された『朝日新聞』の記事

この中の写真の下のキャプションに「私が「独身」「内気」「親を憎んでいる」と思う？すべて間違い。それが偏見、と読者に語りかけるライトさん」というキャプションがついています。普通じゃないとすぐわかりますが、独身でも内気でもないし、親を憎んでもいないのに、みんなそんなふうに思っちゃうんだという。この記事が出てすぐ、東京大学先端科学技術研究センターに日本事務局が立ち上がりました。

図3

私のゼミの開催では、30人ぐらいの「本」の方が集まってくださいます。最初に書庫という部屋に入っていただいて、そこでスタッフも含めて皆さん自己紹介します。1階のホールにあらすじを貼り出し（図3）、「読者」はこのあらすじを読んで、借りる本を決め、30分間一対一でお話を伺います。

今日は、何度か本になってくださった障害者プロレス「ドッグレッグス」のスターレスラーである鶴園さんのあらすじをご紹介しましょう。「生まれつき障害があり、もの心ついた時には障害のある子どもの施設で生活していた。親の暴力から逃れるために家出した。そのあと、食べることもできなくて、ずっと椅子に括り付けられたような状態で過ごし、足を切断した……今、何のためにリングに上がり続けるのか話したい」。ドッグレッグスを描いた『無敵のハンディキャップ』（北島行徳著）というドキュメンタリーの本があるんですが、この本がめちゃめちゃ面白くて、大爆笑だったんです。だからドッグレックスの選手に是非来てもらいたかった。以後、鶴園さんは何回も参加してくださいました。皆さんも借りてみたいなぁと思いませんか？ LGBTの方やホームレスの方と一対一で話したことありますか？

さて、ダイバーシティを受け入れる姿勢を育むための5つめのヒントは、「脱身体化、つまり体験を通して学習してしまったものは、体験を通して学習しなおさないとダメだ」ということ。これは、今ではテレビキャスターにもなっている明治大学教授の齋藤孝さんの言葉です。ずいぶん昔ですが、齋藤さんの「半歩踏み出す身振りの技化」という論文を読んで、そこに出てきた「青い目茶色い目」というアメリカの小学校の実践を記録したビデオがどうしても見たくなり、貸してもらえませんかと、お会いしたこともないのにお手紙を書きましたら、ご親切に貸して下さったんです。このビデオを見て衝撃を受けた齋藤さんが書いたのがこの論文なんですが、そこには「差別はいけないとしばしば聞かされてはいるが、自分自身が差別の加害者とも被害者とも深刻には思えないために、差別問題がリアリティーを持たず、いざ差別の状況が目の前に現れた時に、何もできずに傍観してしまう。この傍観する身体こそが、差別の構造を支える温床となっている」と書かれていました。そして自分が高校生のころのエピソードを実名で書いているんです。体育教師のノジマという教師が、授業終了時に生徒をグランドに集めたところ、1人の生徒が5分遅れてきた。そしたらその教師は、「お前のために、ほかの25人が5分待たされたんだ。だからお前は5分かける25人分グラウンドに立ってろ。ほかの人は解散、教室に帰ってよし」と言ったんだそうです。齋藤さんもその中の1人で、どうしていいかわからなかったけれど、みんなどぎまぎしながら教室に帰った。しかし後からその時のことを思い出して無性に腹が立った。どうして、その5分は自分にとってなんともなかったから自分の5分は引いてくれ、と言えなかったのか。その半歩だけでも踏み出せなかった自分への不甲斐なさ、それがこの論文を書かせたというんです。この時自分は、仲間を見捨てるとはどうすることなのかを体をもって学んでしまったというんです。実は私にも似た経験があるので、心に響きました。

さて、6つめは、「自分の中にある多様性の知覚

を通して他者の多様性にも気づこう」というものです。自分自身の中にある異性性、子ども性、高齢者性、外国人性に気づくことが大切だということ。『外国人とのコミュニケーション』(J.V. ネウストプニー著)という本には、外国人さえグラデーションだと書いてありました。えー?外国人はグラデーションじゃないでしょう。日本人か外国人のどちらかではないの、と思っていた自分は、これを読んでなるほど、こういうふうに考えられるのかと思ったんです。たとえば、フランス人の両親の間に生まれた金髪で目が青い子どもが小学校にいる。しかし、その子は日本で生まれて、ずっと日本で育って、日本語しかできないとしたらどうなんだろう? そういう人は外国人なのか、と問うてくるわけです。そうすると、外国人というか、少なくとも外国人性はグラデーションなんだと思ったんです。性別を考えても、私は男性ですけれども、男性性だけでできているわけではない。女性と話す時には自分の女性性が表に出てきて、話しやすくなることもある。ちっちゃな子どもと遊ぶ時、自分もちっちゃな子ども(子ども性)になって遊ぶ。つまり、自分の中にいろんな〇〇性というものがある。このことに気づくと、ダイバーシティを受け入れやすいんじゃないかと思います。

7つめに行きましょう。「自分の特権に気づこう」です。マイノリティを差別するのはやめるべきだ、と考える人は少なくないんですけれども、これは、そういう社会はよくないとか、そういう人はよくないと、相手のことを言っているわけです。しかし、実は自分自身が差別されない特権を持っているんだと考える人は少ない。つまり自分ごととして、自分が差別されない特権側にいると考えてみようというのが、7番めのヒントです。人はいろいろな状況で生まれてきているんですが、生まれる前に自分がどう生まれるかを選んで生まれてきているわけじゃない。日本人に生まれようとか、金持ちの家に生まれようとか、健常者に生まれようとか選んで生まれてきているわけじゃない。すべての人は生まれてきたところに生まれてきたわけなんです。ですから、生まれながらにいろいろな特権を持っている人がたくさんいる。自分にはどんな特権があるんだろうと考えてみてください。

8つめは、「本質主義から脱却しよう」です。日本人とはこれこれだ、男とはこれこれだっていう言い方があります。つまり、日本の男子には、日本の男子として備えているべき本質があり、そこに価値があるんだと考える、ということ。逆に言えば、それがなければないほど価値が下がるっていうことです。本当にそうなのか。もっと内部の多様性に目を向けて、多様であっていいじゃないかと考えてはどうでしょう。ダイバーシティを受け入れるためには、本質があるという考え方ではなくて、多様な男性や女性がいる、あるいは男性でも女性でもないという人もいる。多様な日本人がいる。こういう風に考えてはどうかということです。多様性っていうのはすでに存在しているんです。これから多様性を増やしていこうというよりも、すでに存在している多様性を認めていこうということです。先ほどお話したように、人数的にもたくさんいる。あるいは自分の中にも多様性がある。だからまちを見ると、ほとんどが日本人だろうとか、ほとんどが日本語をしゃべるだろうとか、みんなヘテロセクシャルだろうとか、そんな風に均質的に見ているかもしれないけれど、実は現実はもっと多様なんです。ここからは、今自分が取り組んでいる中野区のダイバーシティのまちづくりについてお話します。中野ダイバーシティ・プラットフォーム(NDP)と名付けたプロジェクトです。自分にどのようなマイノリティ性があったとしても、それを隠したり恥じたりすることなく、ありのままを受け入れてくれるまちがあったら、のびのびと安心して暮らせるだろう。そんな多様性が受け入れられる安心した社会にこそ、自由で創造的な発想が育つんじゃないか、と考えて始めました。

私は心理学出身なので、創造性にもとても関心を持っています。人はどのような時に創造的になるかという面白い実験があるんです。美術学校の作品制作の現場で行なわれたんですが、自由に作っていい環境で制作したグループと、凄く偉い先生たちがあとで評価するからいいものを作りなさい、という条件下で制作したグループの作品を比べてみると、前者の方が創造的だったというものです。自由に発想してよいという時に創造的になり、評価されるとか、変なものを作ったら大変だとなると、すごく縮こまってしまう。自分のマイノリティ性を隠して、たとえばLGBTQの方がそれを隠して生きるっていうことになると、の

びのびと自由に生きられないだろう、と思います。

さきほど車椅子の問題を取り上げました。階段がなくてスロープがあればいいけれど、階段しかないところは、健常者の方がちょっと持ち上げてくれて、それを依頼することに車椅子の人もあまり気をつかわなくていい環境。お互い様だよ、自分は自分なりにマイノリティなところがあるわけだし、車椅子の人がいれば、それを助けるのは当たり前だよって思ってくれるまちがあったら素敵でしょ。

そんな中野をつくりたいと思ってプロジェクトを始めました。どうやって具体化しようかを考えた時、これまで障害のある方たちは障害のある方たちだけで集まって、性的マイノリティの方は性的マイノリティの方たちだけで集まって、外国人や外国人を支援する人たちもそういう人たちだけが集まって活動してきたけれど、それはそれとしてとても大切だけれども、それだけだと自分たちの文化が強まって、ますます外からマイノリティに見えてしまうと考えました。一緒に戦っていける部分もある、要求していける部分もあるんじゃないかと。また、一般的にマイノリティというふうに言われている人じゃなくても、誰もがどこかでマイノリティであり、かつマジョリティであるなら、誰もが参加していい。そんな中野のダイバーシティの土台（プラットフォーム）をつくりたいということで、多様なキーパーソンに集まっていただいて、まずコア会議という組織を立ち上げました（図4）。このコア会議でキーパーソンの方々に集まっていただきながら、さらに多くの方々が参加するラウンドテーブルを開きました。一回めは50人ぐらいお集まりになったんです。名刺交換したりしながら、そこは自分たちも一緒にできるよとか、自分たちのやっているイベントに一緒に参加してほしい、というような会話が広がりました。みんなでバラバラにやるんじゃなくて、つながってやろう。それぞれの活動をそれぞれがやるだけじゃなくて、助け合ったり、みんなでやったりもしようと考えました。

ヒントはあと2つ残っているんですが、こういういろんな方が仲間になるといいなぁと思うのが、この次の9番めのヒントです。20年前に上智大学で開催された異文化間教育学会の大会で、ジェームズ・バンクスという多文化教育の先生をお呼びしたことがあって、その先生の講演が本当に目からウロコでした。「逸脱している者やマイノリティが、むしろ民主主義を守ってきた」と言うんですよ。どういうことかなと思ったら、彼はこういうふうに言ったんです。アメリカの政治を司っている人は、アメリカは自由の国だ、民主主義の国だと声高らかに言うけれども、アメリカの民主主義を守ってきたのは、中央で政治を司っている白人ではなくて、「あなたたちはアメリカが民主主義の国だと言っているのに、自分たち黒人を差別してるじゃないか」、「どうして女性の権利を守らないんだ」と言って声を上げている社会の周縁にいる人たちなんだと。そういう人たちが民主主義を守るよう声を上げているから、アメリカの民主主義がかろうじて守られているんだと言うんですよ。いろんな多様性のある人たちがいるということ、そこから声が上がってきて、本当に民主主義が守られるんじゃないかと考えました。目からウロコでした。中野も、多様な人たちが声をあげられるまちになるといいなと思います。

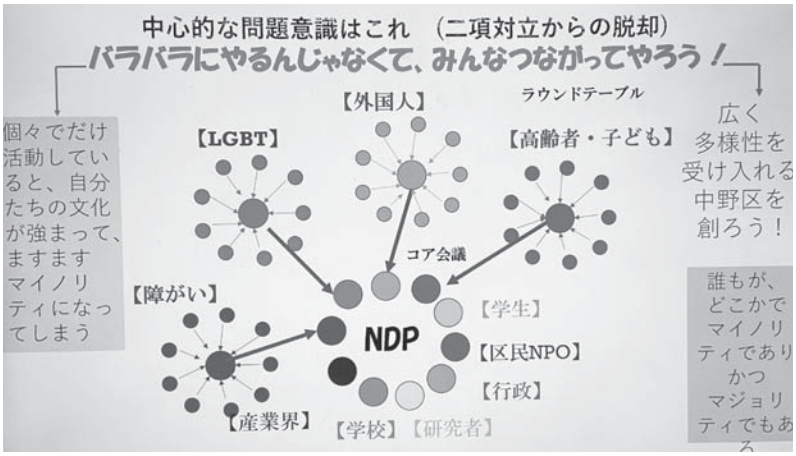

図4

さて、最後のヒントは「国際より文化際で考えよう」です。異文化間教育学会という私のメインの学会は、40年以上前に「国際」からスタートした学会です。当時「帰国子女」と呼ばれた海外で育って日本に帰ってきた日本人の子どもたち（現在は「帰国児童生徒」）が、学校でいじめに遭う。自分が海外で

培ってきた自分の側面を、日本ではできるだけ見せないようにしないといじめられちゃったわけです。「外国はがし」といわれます。日本人はそんなふうに先生に質問しないとか、日本人ならそんな反対意見は言わないとか、そんなふうに言われる。先ほどの本質主義ですね。それはおかしいと考えたいろいろな専門領域をもつ研究者が始めた学会なんです。それから長らく、研究は「外国・外国人」つまり「国際」が中心でした。しかし近年、「文化際（ダイバーシティ）」の研究が発表されるようになりました。

その大きなきっかけとなったのは、ヒューマンライブラリーです。これに関するシンポジウムが学会主催で開催されました。手話は一つの言語であり、文化なんだ（「ろう文化」）というような研究が発表されたりしました。「国際」より「文化際」に注目した方が、多くの人に関心を持ってもらえるという理由がいくつかあるんです。一つは、外国や外国人に関心がないという人は少なくないということ。自分と直接関係ないという人がたくさんいるんです。自分の仕事場にはいないとか、海外旅行に行く時は旅行ガイドがいるから大丈夫とか。だから、自分事として外国や外国人に関心がないのも不思議ではないんです。でも、「文化際」ということになると、誰にでももっと身近です。そして、「文化際」への関心が、ひいては国と国との「国際」という異文化への関心にも通じるんじゃないかと思います。

もう一つの理由は、日本か外国かという二項対立の図式にとらわれた固定的な異文化理解から解放されることです。二項対立からの脱却はこの学会にとってとても大切なことであり、内部の多様性に目を向けることで、異文化間教育学はより懐の深いものになると信じています。

質疑応答

会場からの質問1　見た目やジェンダーに関して、まだまだ個人の多様性に関して、まだあまり理解をされていない方が世の中にはいらっしゃるかと思うんですが。そういう方に会って、そういう方の意見を聞いた時に、ちょっとでも理解をした私たちが、その方の意見に対して完全に否定してしまうというのは、よくないのかなと思ったんですが、先生はその点に関してどのように考えられますか？

横田……先日、私の自分の授業のゲストスピーカーに中野区の区議会議員をされている石坂さんという方に登場していただきました。彼はゲイをカミングアウトしている方なんですけれども、ちょうど学生さんからの同じような質問に答えてくれました。知ってもらえたらうれしいという気持ちを持って、時間をかけてゆっくりと説明するんだというんです。やっつけるとか、けしからんという気持ちでそれをしようとすると結局上手くいかない。やっぱり時間がかかるんですね。びっくりしちゃうことってたくさんあるわけです。初めて会うことにはすべてびっくりします。多様性はおもしろいなぁっていうふうに感じ始めると、びっくりしちゃうかもしれないけれど、同時におもしろいっていうふうに感じるようになります。たとえば留学したいという気持ちは、怖いと同時に楽しみだと思うじゃないですか。それと同じように、新しいものに出会うっておもしろいなあっていう側面が必ずやあるんですよ。いっぺんに全部変えてやろうとか、自分は知ってるんだというように考えない方がいいと思います。

会場からの質問2　以前、足のない障害者の方が、手助けをしてくれるというのは優しさではなくて、普通の人間として接してほしい、というスピーチをしている映像を見たことがあるのですが、そういう反対の立場の障害者の方たちには、どういう気持ちで対応されているのでしょうか。

横田……これは、マイノリティーや障害者のためにやってることじゃないのです。中野がこういうまちになってほしいという、誰もがどっかでマジョリティでありマイノリティなんだから、みんなでつながってやろうよっていうことです。障害があってかわいそうだから助けてあげるっていう活動じゃないです。ただ、今日の話を聞いて、障害がある人を見てかわいそうだなって思う自分はよくない、なんて考えないでください。そのことを一歩踏み込んで、どうして自分はかわいそうだと思うんだろうか、あるいはかわいそうだから手助けするのか、ということ、先ほど申しました「本当のところはどうなのかを考える」とても良い学びの機会なんだと思います。

たとえば、白杖をついている方がいらっしゃるとして、このまま歩いていくと段にぶつかっちゃいそうだという時、助けてあげようかなとも思うけど、障害の人を勝手に助けていいのかな、と考えたとします。確かに、いきなり手を引っ張って危ないからと言って、ぎゅっと引っ張ったりしたらビックリしちゃいます。でも「段があるので、私が誘導しましょうか」ってひとこと聞けば、「ええお願いします」あるいは「慣れている道なんで大丈夫です」と言うかもしれない。どうしたら「正しく」できるのかなと思うんですけど、「どうですか」って聞いて、「ありがとうございます。今は大丈夫です」と言われたら、聞いてよかったと思うでしょう。あるいは「こういうふうにしてください」「ありがとうございます。ぜひお願いします」って言われるかもしれない。それは自分の気持ちに正直だと思うんですね。自分の気持ちでは何が正直なのか?助けたい気持ちはあるけれども、助けるなんてお節介かな、助けるなんて目立っちゃうかな、助けるなんて言ったらかわいそうに思っているっていうふうに思って怒られるんじゃないか、と考えるかもしれません。いろんな気持ちがある中、「わからないから聞いてみよう」、このほうが正直かなと思います。そんなことを考えていくと、だんだんに経験が蓄積されて、慣れてきて、こういうふうにすれば、そんなに気を使わなくても自然にできると感じられてくると思います。

会場からの質問3　中野というまちを、たとえば、万引きとか振り込め詐欺といった犯罪を減らすという意味でも、助け合いのできるまちに作り上げたいという意味合いも込めての活動というふうに捉えてもいいでしょうか。

横田……私たちの中心的なテーマではありません。ただ、みんなでつながっていこうという活動ですから、そういう中で犯罪が少なくなったり、今まで自分だけでしかなかったのが、中野のまちで理解してくれている人たちがだんだんに増えてきて相談できるようになったり、追い詰められてしまわないで相談できるという環境が整うということで、結果的には犯罪も少なくなるということがあるかもしれません。

会場からの質問4　講義の中で、自分の中にある異性性とか多様性に気づくことが大切だとおっしゃっていましたが、具体的に自分が気づいていくのに必要な行動とか意識とかはあるのですか?

横田……自分で自己分析したいということであれば、一人の静かな時間にノートを持って、自分の中にどんな側面があるだろうかと、たとえば男性性・女性性とか、そういうことをテーマに、自分の中で考えてもよいし、あるいは、自分が女性的だと思っているのはどんなことなのか、自分が男性的だと思っているのはどんなところなのか、これって本当に女性的なことなのか、本質主義からの脱却という話を聞いたけれども、これはどうなんだろうといろいろ書き出してみる。そんなことはできるかもしれないと思います。

それから、実際にちっちゃい子どもと遊んでみる。その時、ちっちゃい子どもと無邪気に砂場で泥だらけになって遊べた。これは子どもっぽいという意味じゃ全然ないです。むしろそういうふうに自分の自我の状態を子どもに持って行くことのできる柔軟性です。そして、会議の時にはしっかり考えられるというふうに、自分の心の状態を適切に切り替えられる。もし子どもと無邪気に遊べないとしたら、何が自分を子どもと無邪気に遊べないようにしているのかな、と考えるのもいいと思います。いろんな側面で自分の経験を書き出して文字にして表わしてみるということが有効ではないかと思います。

会場からの質問5　国際コミュニケーション学部の今年の科目で、多様性について考えるというリレー講義があり、私も2回ぐらい授業を担当させていただいたんですね。一年生を対象にして、セクシャルマイノリティとか、ジェンダーとか、障害とか、民族人種の問題といった基本的なところを学生に理解してもらうという目的で、科目をちょっと展開してみて、それなりに手応えがあった部分がありつつ、もう片方で、やはりフェミニズムとかジェンダーについて考える時に、ある程度の抵抗感を持つ場合がある。それに対して、どういう応答がいいのか、教員としても悩ましいところがあります。そういうことでヒントをうかがえるかなと思うのですが、いかがでしょうか?

横田……私も一度忘れられない経験があります。ある授業で自分の中の多様性という話をした時、私の中にも自分の考える女性性があります。皆さんもあるでしょって言ったら、ある男子学生が手を挙げて「おれは男なんで、自分の中に女はいません」みたいなこ

とを言ったんで、びっくりしたんです。多様性について、まさに多様な方々がいろいろ考えていると思うんです。ある人にはすごくのんびり行かなきゃいけない。激論を戦わせて説得するということではうまく進展しないことがあります。ゆっくりと考えてみようねと。たとえばジェンダーのことでそういうふうに話された人も、子どもと遊ぶのは好き？子どもと遊んでる時どんな気持ちになる？と聞いてみます。男性性・女性性といった多様性のことから、ちょっとずらして子ども性ということについて話を聞いてみる。自分も小さい頃は本当に楽しくて今も忘れられないとか、という話になると、あなたにもいろいろな子ども性があるよね、自分の中にもいろんな側面があるよね、マッチョな気分になる時もあるけど、そうじゃない時もあるよね、というような話をして、少しは理解してもらえました。

30年ぐらい前に地域で国際交流の団体を立ち上げた時に参加された方の中には、いろんな方がいて、「私は国際人だから」っていう感じで、バンバンやっちゃって、留学生たちには困っていたらお金もあげちゃうという方で、それに対してほかの方が、それはやり方がおかしいってぶつかったりしたことがあったんです。その方は本当に熱心な方で、そのエネルギーたるやものすごくて、なんでも困ったら来なさいという感じでした。でも、そういうところから始まる人もいる。初めから国際人じゃないし、初めからダイバーシティに対して理解が深いわけでもないし、自分なりの生活環境の中から作り上げてきた、自分にとって精一杯の対応をするなら、そのことの良さもある。あの人のところに行ったらお金もくれるし、ご飯も食べさせてくれるということで、どんどん来ちゃって、それでその人が気づいていくというプロセスがあるんです。「ああ、これだけが支援の仕方じゃないんだ」と自分自身で気づいていく、自分自身で気づいていくようにするにはどうしたら一番いい機会があるかなって考えるのが、その頃やっていた私の役目だと思いました。そんなにぱっといい案が出てくるわけじゃないんだけど。つまり、初心者という言い方は変かもしれませんが、初心者をバカにしちゃいけない。誰でも初めは初心者なので、初心者なりにだんだんに分かっていって、次の初心者の人もまたそうやって育っていく。国際交流には意識の高い人しか入っちゃだめとなったら、広がらないと思うんです。

質問5の方の応答　簡単に答えが出るわけではなく、難しい問題だと思いますが、たいへん参考になりました。初心者というのはなるほどと思ったのですが、学生の中には、SNSでいろいろなアイデアを拾っている者もいて、いわゆる論破文化みたいなものを身につけているような学生もいて、最初から論破しようとしてくることもあります。それをどう解きほぐしていくかが、大学における教育の役割として重要だなということを痛感しているところです。

横田……そのとおりだと思います。

参考文献

1. 斉藤孝「半歩踏み出す身振りの技化」、『共生の方へ』栗原編、弘文堂、1997年。
2. 佐藤郡衛・横田雅弘・吉谷武志「異文化間教育学における実践性～現場生成型研究の可能～」、異文化間教育学会編、『異文化間教育』、23号、2006年。
3. ダイアン・グッドマン『真のダイバーシティをめざして』出口真紀子監訳、上智大学出版、2011年。
4. 坪井健・横田雅弘・工藤和宏編著『ヒューマンライブラリー～多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究～』、明石書店、2018年。
5. ネウストプニー J.V.『外国人とのコミュニケーション』岩波新書、1982年。
6. 横田雅弘「まちづくり授業と現場生成型教育」『学生まちづくらーの奇跡』、学文社、2012年。
7. 横田雅弘「異文化間教育とダイバーシティ：理論と実践をつなぐ―第40回研究大会公開シンポジウムの報告を中心に―」『異文化間教育』51号、2020年。
8. 横田雅弘「ノーマリゼーションの理念と地域の国際化」、『異文化接触と日本人』横田・堀江編、至文堂、1994年。

＊中野まちづくりのHPは　ndp.tokyo/about　で検索してください